
僕の心に青い花

佐鏡霧生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の心に青い花

【Nコード】

N3289V

【作者名】

佐鏡霧生

【あらすじ】

澄み渡る青い空。

切り裂くように浮かぶ入道雲。

吹き抜ける風が、夏の香りを運んで、草花を軽やかに踊らせる。

今ここにいる僕は、この景色に確かな生を感じて、呼吸をしている。

長閑な時の流れが、暖かい人の温もりが、

忘れかけていた大切なものを僕に思い出させる。

あの年、僕は少しだけ大人になった。

少年、蓮見透。

彼はその繊細且つ理知的な性格故に、苦悩の日々を送っていた。そんなある日、彼はその短い生涯に幕を下ろす為、自殺を図った。だが、彼の思惑とは裏腹に一命を取り留める。

そして、自然に囲まれた田舎で、療養生活を送ることになった。

長閑に移ろいでいく景色の中、彼は何を感じ、何を得るのか。

思春期に少年から大人へと成長する葛藤を、痛いほどリアルに書き記した青春文学。

僕の心に青い花

「ストレス、疲労、睡眠不足……色んなことが蓄積されていたのでしょう」

誰かの話す声が微かに耳元に届いた。

目を開くと、見慣れない白塗りの天井が視界に広がった。見ているだけで押し潰されそうになるほど圧迫感を持った天井はまるで僕と睨めっこをするように見下ろしている気がした。

次第に僕はその天井から目が離せなくなっていた。瞬きをするのも忘れて見つめていた。

そしてなんとなく、本当に天井が落ちてきて僕が潰される光景を頭に描いていた。

身体が鈍い音を立てて少しずつ壊れていき、搾り出した果汁のように僕の血が流れ出す。

生々しい痛みが全身を襲う。僕は不意に歯を食いしばっていた。だが、不思議と恐怖感はなかった。

僕の頭はまるで意思のないもののようになり、ただ粉々になって潰れるその過程だけを描いていた。

それはまるで無声映画を上映する古い映写機のように不明瞭で機械的なものだったが、僕の脳内では現実味を帯びた映像として再生された。

「透君。気が付いたかね？」

ここは何処だろう。

そんな必然の疑問が頭に浮かんだのは僕を呼び掛ける声がしてからだった。

僕の意識がそこまで到達するのに要した時間はほんの数分のことだったのかもしれない。

だが、僕には随分と長い間、天井を見つめていたように思えた。

「気分はどうだい？」

声のした視線の先には、白衣を着た柔和な顔付きの男性が椅子に座ってた。

その風体は医者のもので、患者の容体を労わるような、心配気な表情を浮かべている。

そしてそれは同時に、患者が誰であるかの答えを指し示すかの様に医師の視線がそれは僕のことだと示唆していた。

だが、僕は未だ僕自身の置かれた状況を飲み込めずにいた。

目の前の白衣を着た男性が医者であり、僕はその患者だ。そして僕は白塗りの部屋にあるベッドに寝かせられている。

その事柄から此処が病院であることは容易に理解出来た。

しかし、どうしても分からないのは何故僕が病室のベッドで目を覚ましたのかということだ。

僕は過去の記憶を遡り、雑然と事態が転がる頭の中を整理しようと努めたが、回想の中の出来事は酷く不確かな断片的なもので、これと言った説得力を持って僕に回答を示してはくれなかった。

「覚えていないのかい？」

医者は僕の心の中を見透かす様に見据えていた。

僕はその問いかけに、無言のままこくりと頷いた。

それまで柔和な顔をして僕を見ていた医者の表情が一転して固くなった。睨むというように表現した方が適切だと言える、眉間に皺を寄せた険しい視線は威圧するような凄みを持って僕を突き刺した。

僕はそれに少し気圧されながらも、ぶつかり合う医者との視線を背けようとはしなかった。

僕は僕自身の身に何があったのかを知りたかったのだ。

その為にはこの視線から目を逸らしてはいけなさと、直感的にそう思っていた。

医者の唇が微かに動くのが分かった。

だが、その口から漏れたのは言葉ではなく、およそ声とは呼べない

微弱な振動で、何かを言い掛けて躊躇っている様子だった。

そしてふと医者は深い溜め息をついて、僕から目を逸らすように視線を落とした。

窪んだ瞼に暗い影が落ちる。

そこにはもう鋭かったはずの眼光はなく、哀れみを含んだ瞳がただ足元を見ていた。

医者が改めるようにして僕の名を呼んだ。

事実を聞かされるのだと端的に思った。

その瞬間、急に僕の心臓が強く脈を打ち始めた。

本当は知ることが怖かったのかもしれない。

それがとても嫌な記憶だということを頭のどこかで分かっていたのだろう。

「君は自殺を図ったんだよ。多量の睡眠薬を飲んで」

医者はあくまでも落ち着いた声で、一言、一言を噛み締めるように、僕に事実を告げた。

それは、僕の頭に散りばめられた断片的な記憶と重なり合い、失われた場面を、その時の心境を僕の中に蘇らせた。

初夏の日差しを浴びた蒸し暑い部屋の中、湿気を孕んだ生温い空気が漂っている。

虚ろな瞳に映し出された、淀んだ視界に捉えたのは、右手から滑り落ちたコップから、僅かばかり飲み残していた水が床を滴っていく様子だった。

もうすぐ楽になれる。薄れゆく意識の中、儚い人の夢を、終幕に向かう景色を、僕はこの目にしっかりと焼き付けようとしていた。だが、どんなに目を凝らしてもそれを上手く直視することは出来なかった。

何故だろう。

不意に視界がぼやけて、僕の頬を一筋の滴が零れ落ちた。僅かな温もりを感じられたそれは、涙という、まだ僕の中に残された人の心だった。

しかし、それに気が付いた時には僕はもう人としての機能を果たせなくなっていた。

次第に目を開けているのも辛くなり、ゆっくりと重たい瞼を閉ざした。

果てしない闇と物寂しい空虚感が僕を支配する。

これが僕の望んだ結末なのか。

無の世界に還れば、穏やかな静寂が時の流れを止めて僕を待つてくれているはずだった。

あまりにも愚かだ。

僕は僕自身が選んだ死を抱いて、地に崩れ落ちた。

その選択が正しいか間違っていたかなんてその時の僕にはもうどうでもいいことだった。

全てが無意味に思えた。

そして僕の意識は途絶えた。

「思い出したかい？」

ふと枕元に立った人影が、穏やかな声で僕に何かを囁いた。

だが、今の僕にとってそれは言葉としての意味はなく、音という最低限の情報を与えたに過ぎなかった。

今僕の頭は、一気に押し寄せた津波のような回想の渦に飲み込め、忽然として現れた現実と言う名の光景を目の当たりにして呆然としていた。

僕はこれからどうすべきなのか。

一度は捨て去った筈の我が身を案じるその理不尽さに少なからず違和感を覚えながらも、今ここで平然と呼吸している、自分という生

き物が得体の知れない物のように思え、生と死が混在する矛盾した感覚に囚われた、自らの心情のやり場に困惑の色を浮かべていた。素直に助かって良かったと思うべきなのか、思い通りに死ぬことが出来なかったと悔やむべきなのか。

今の僕にはまだその答えは分からなかった。

「とりあえず今は休みなさい。これからのことはそれから考えよう」
医者は僕に諭すようにそう言った。

今やるべきことは、記憶や心境の整理なんかではなく、安静にして休養することだと医者は言いたいのだろう。確かに今の僕は、心身の疲労もあり、物事に対して冷静な判断を下せる状態とは言い難い。僕もその考えには概ね同意できた。だが、一つだけ聞いておきたいことがあった。

それは、これからのことにはさして関係のないことかもしれない。

しかし、今の僕にとっては最大の疑問でもあった。

「……ここへはどうやって？」

僕の言葉を聞いて医者は驚いたように目を見開いた。

それは質問の内容ではなく、僕が声を発したことに對しての反応だったように思えた。

それまで何を聞かれても無言を通していたからか。

あるいはショックから話せないとも思っていたのかもしれない。恐らく僕のような自殺未遂を図った患者の多くには見られる症状なのだろう。

僕はその中では割と物分りのいい部類のようだが、そんなことはどうでもいい。

僕が知りたいのはその質問の答えだった。

「君の友達が救急車を呼んでくれたんだよ」

「名前は確か……哀川藍ちゃんって言ったかな」

哀川藍……。僕はその名前を聞いても暫くぴんとこなかった。

あまりにも予期せぬ名前だったからだ。それが同じクラスの女子生徒のことだと気が付くのに、少し考えるとと言う手前が掛かってしま

ったのは、日頃如何にクラスメイトに対して無関心であるかの表れでもあった。

更にそれを裏付けけるかのように、その哀川藍に関して僕が知り得ることは、個を識別する為に必要な名前と言う符号だけであり、顔や背格好は愚か、どんな人物なのかも定かではない。

そのような人物が何故僕の家を訪れ、救急車を呼び、僕を助けると言う不当な処置を施していったのか。

それを今ここで思案しても仕方のないことだろうし、この医者に問うのも不毛なことである。

この疑問については本人、つまり哀川藍の口から直接的に聞く他ないだろう。

僕は煮え切らない思いを振り払えないでいながらも、この場合はそれで納得するしかなかった。

「そうそう。お父さんも仕事が終わったら来てくれるからね」

医者は努めて明るいい声でそう言った。僕に安心感を与える為の気遣いのつもりだったのかもしれない。

だが、僕にとってその言葉は、罪悪感と自己嫌悪を増長させたただけだった。

僕は父からの愛情を感じたことはない。家族とは名ばかりで、本質は同じ屋根の下に住んでいるというだけの他人だ。

これまで僕を育ててくれたのも、愛情からではなく、死んだ母親が遺していった責任と世間体という重荷を代わりに背負っただけに過ぎない。

父にとって僕は人生の汚点であり、過去の過ちであり、自由を奪った枷なのだ。

尤も、そんなことは鼻から分かり切っていたことだし、今更何も望んではない。むしろ生活費の工面で負担を掛けているということに自責の念さえ感じている。

願わくは、形式だけの親を演じるのを辞めてくれたらどんなに気が楽だろうかとも思う。

だが、それを僕が許したところで、法がそれを許すことは出来ない。夫婦間の離婚など紙切れに署名と捺印をするだけでいとも容易く成立してしまうというのに、親子の場合はそうはいかない。

この国の治安を守る為に作られた法律とやらは存外面倒臭く出来ている。

だからいつその事消えてしまえば、僕が存在をなかったことにすれば、父はその肩の荷を降り、枷を外して、自由に生きていける筈だった。

父に会わせる顔がない。

今度父と会う時は、こんな死に損ないの腑抜け面ではなく、自室で安らかに眠る死顔が良かった。

「では私はこれで失礼するよ。ゆっくり休みなさい」
その言葉を残して医者は病室を去っていった。

一人取り残された病室は、窓から西日が差すばかりで、薄暗く物寂しい、息が詰まるほどの閉鎖的な空間だった。

唯一、外界を望むことの出来る窓の景色も、屹立するビルの群れが灰色の世界を織り成すだけで、殺風景と呼ぶに相応しい、取るに足らないものだった。

僕は嫌い倦怠の中、徒らに過ぎる時間をただ無気力に消耗していた。これからこの檻の様な場所で、日常の束縛を課せられて過ごさなくてはならないのだろうか。

それは一思いに死を遂げることよりも、惨めな事のように思えてならなかった。

僕は気怠い溜め息をついて、虚空を仰いだ。頭上には相変わらず墮落しそうな天井が、まるで空は四角いのだと迷妄させるように、僕を見下ろしていた。

憂いを帯びた瞳はそれを一瞥して、逃避するかのように深き闇へと閉ざされた。

目蓋の裏では、無益な空想の中に過去の追憶が巡る。幼き日に見た光景が、決して触れることの出来ない憧憬が、恍惚の眩暈として僕

の脳裏に映し出された。

僕は直走っていた。

一面に広がる田園の、隙間を縫うような砂利道を。何の迷いもなく、恐れも知らず、ただ風に遊ばれるように。

頭上を見上げると、澄み渡る青空に浮かぶ、切り裂くような入道雲の波間に、眩いばかりの耀きを放つ太陽が、僕の身をじりじりと焦がしていた。

耳を澄ませば、儚くも力強く生きる蝉の鳴き声が、大空を揺蕩う鳥たちの囀りが、穏やかで涼しげな川のせせらぎが、風の音に乗って夏を奏でた。

肌に張り付く汗を孕んだＴシャツも、泥で塗れた短パンも、汚れて少し着心地が悪かったが、僕の心は心地良いくらい、穢れなんてものを知らなかった。

目に見えるもの、耳に聞こえるもの、手に触れるもの、そのどれもが新鮮でいて心躍るような感動を僕に与えて止まなかった。

生きている。僕は深い呼吸をして、大声でそう叫び出したくなるような、清しい思いをこの胸一杯に感じていた。

そして、走り疲れた夕暮れ時、憩いを求めて腰掛けた木陰の下、何かに惹かれるように目やった視線の先に、僕は、一輪の青い花との邂逅を果たす。

それは何人たりとも触ることの出来ない高嶺に、美しく凜として咲き誇っていた。

時が止まったかのように恍惚として魅入った。

その花を手にしたい。

切なる願いが胸の奥底で燦る。だが、どんなに希求しても、その花は手の届かない場所で、軽やかに風に戯れるように、花弁を揺らめかせて踊っているだけだった。

この空を赤く染め上げる夕陽が、もうすぐ人知れず沈もうとしていた。それでも僕は、このままで、熱く滾る感性を閉じたくはなかった。

そんな僕を横目に、帰りを急かす鳥が、その姿を見せ付ける様に漆黒の翼を広げて羽ばたいた。

僕も空を飛べたら……。

その時、西からの強い風が吹き抜けた。それはまるで僕の背中を押すような優しい風だった。刹那、不思議と空をも飛べそうな気がした。

何も迷いはない。

何も怖いものはない。

もう一度、あの風が吹いたら飛び立とう。青い花の下へと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3289v/>

僕の心に青い花

2011年10月9日13時02分発行